

勉強会「書誌コントロールの将来に関する米国議会図書館ワーキンググループ最終報告」輪読（2008/6/10）報告

On the Record : Report of The Library of Congress Working Group on the Future of Bibliographic Control. January 9, 2008

1 . 最終報告発表までの経緯⁵⁾

1 - 1 . 2000年の出来事

・ LC 創立 200 周年記念行事として開催された「新千年紀のための書誌コントロールに関する 200 周年記念会議」

・ LC 館長ピリントン（James Billington）の依頼により結成された「LC の情報技術戦略に関する委員会」による報告書『LC21：LC のためのデジタル戦略』の発表。

1 - 2 . カルホーン報告書（2006年3月）

LCSH の廃止などを唱えた。コーネル大学のカルホーン（Karen Calhoun）による報告書『目録の変化する本質および他の情報発見ツールとの統合』

1 - 3 . LC がシリーズ典拠の廃止（2006年6月）

1 - 4 . 書誌コントロールの将来に関する米国議会図書館ワーキンググループ設立（2006年11月）

・ 2005 年 1 月、図書館サービス担当副館長マーカム（Deanna Marcum）が、電子情報アグリゲーターのエブスコ（EBSCO）社主催のセミナーで、「目録業務の将来」と題する講演を行った。マーカムは目録からウェブ検索エンジンへの利用者のシフト、大規模デジタル化プロジェクトの進行という流れに言及し、費用対効果の低い現状の目録業務への危機意識を顕わにした。

・ WG 発足にあたり LC は、ウェブ検索エンジンの進化、インターネット環境の充実、電子情報資源の爆発的増加に伴い、図書館業務が大幅な変革を迫られていることを指摘している。

1 - 5 . ワーキンググループの検討経過

・ 2006 年 11 月 2・3 日の両日にわたり、WG の創立会議が LC で開催され、論点として次の 3 点を取り上げることが確認された。

(1) 進化しつつける情報環境の下で、図書館資料の管理と利用者からのアクセスに対する効果的なサポートを可能にする、書誌コントロールや目録作業の方法に関する調査と知見の提示

(2) (1) で得られたビジョン達成のための図書館コミュニティ全体としての実現方法の勧告

(3) LC の役割と優先事項についての助言

・ 公開ミーティング

第1回(2007年3月8日)

テーマ: 書誌データのユーザと利用

会場: カリフォルニア州マウンテンビュー; グーグル本社

第2回(2007年5月9日)

テーマ: 書誌データの構造と標準化

会場: イリノイ州シカゴ; 米国図書館協会(ALA)本部

第3回(2007年7月9日)

テーマ: 書誌データの経済性と組織

会場: ワシントンD.C.; LC

2. 全体構成

Executive summary

Introduction

Background

Guiding principles

Findings and recommendations

1. Increase the efficiency of bibliographic record production and maintenance
2. Enhance access to rare, unique, and other special hidden materials
3. Position our technology for the future
4. Position our community for the future
5. Strengthen the library and information science profession

3. Introduction

次の5つの一般的領域への勧告を行った。

- 1) 相互協力の拡大、書誌レコード共有の拡大、情報資源に関するすべての“供給連鎖(supply chain)”から生成されるデータの利用を拡大することにより、書誌的生産物(bibliographic production)の効率化を促進する。
- 2) 貴重書や唯一所蔵資料など、高い価値をもつ資料(の目録作業)に力点を移し、こういった資料を顕在化させる。
- 3) Web環境のもとでの書誌コントロールを前提とする。
- 4) 資源の記述に、評価および他のユーザによって供給された情報を取り込むことを目指す。情報資源の中に存在する様々な関係を明らかにし利用するため、FRBRの枠組みの可能性を実現するための作業を行う。
- 5) 現在および将来における、教育並びに意志決定を促す計測基準の開発を通して、図書館専門職を強化する

4 . Background

4 - 1 . LCにおける書誌コントロール

LC は 1902 年以來印刷カードを作成・頒布してきた。その後 MARC になり、さらにはネットワークで MARC 情報が共有されるようになった。LC が共有可能な目録データを提供することにより、米国内各図書館の目録作業が軽減された。LC 目録は信頼のおけるものとされ、WorldCat でも LC データに最も多くの所蔵情報が付けられている。

4 - 2 . LCの任務

書誌レコード作成と規格開発の両分野で、LC は大きな働きをしてきた。国際的なリーダーとしての役割も果たしている。しかし LC は、国立図書館としての法的な地位を与えられていないし、このような活動を行うための資金も持っていない。現在行っているサービスは、定められた権限以上の責任を自発的に果たしているに過ぎない。今後、LC はデジタル資源の目録作成、所蔵資料のデジタル化事業、メタデータ作成等のため、新規投資が必要である。

LC の目録担当者のがかりが退職期を迎えようとしている。現在の目録作成水準を維持しようとするれば、人材の雇用と研修に大きな投資が必要となる。

以上により、今のままの仕組みでは目録作業は困難となる。目録作成にかかる費用を回収できるような新たなビジネスモデルの構築が必要となる。

4 - 3 . LCにおける標準化および実践

書誌レコード作成以外に、LC は書誌コンピュータ関係規格の策定で中心的な働きをしている。MARC21 フォーマットの維持、記述規則の作成と維持、LCC および LCSH のメンテナンス、METS、Z39.50 などの策定・維持である。その数は何十にもおよぶ。これらの規格の多くは、国際的な規格である。例えば、MARC21 はカナダ、イギリスのほか、ドイツも採用しようとしている。

4 - 4 . 書誌コントロールの将来

・2000 年、デジタル戦略に関するレポートが全米研究協議会(NRC)によってとりまとめられた。

・2001 年、「ネットワーク資源とウェブの課題に向けて」というサブタイトルを付した「新ミレニアムへの書誌コントロールに関する 2 百年記念会議」が、LC のための活動計画を作成した。

・ここでの論点の多くは、2006 年、LC の委任を受け、Karen Calhoun が提出したレポートに再び表面化した。

・同時期、カリフォルニア大学での同大学の書誌サービスの将来に関する作業、また、インディアナ大学によって行われた目録作業の将来についての検討など、他の機関によっても同様の調査が行われた。

・2004 年、英米目録規則改訂のための合同運営委員会は、資源記述およびアクセス (RDA) と名づけられた新規則は、「デジタルワールドを意図して、新しい標準として開発・・・」されている。この作業は、FRBR、また 2003 年からの新 IFLA 目録原則の開発によって促進されている。

4 - 5 . 書誌コントロールの将来に関するワーキンググループ

デジタル情報時代において、図書館はいかに仕事をなすべきか、その変化に立ち向かうため LC により設置されたものである。ワーキンググループは、ノースカロライナ大学（チャペルヒル）図書館情報学スクールの部長であり教授である Jose-Marie Griffiths 博士およびアイオワ州立大学図書館部長の Olivia M. A. Madison 博士が共同で座長を勤めている。

2006 年 11 月、最初のミーティングが開かれ、その後 3 回の公開ミーティングを開催。ワーキンググループは 74 の意見書を受領した（うち 15 以上は組織や団体を代表する意見書）。本最終報告は、受領したコメントと証言を考慮に入れたものである。

5 . Guiding Principles

5 - 1 . 書誌コントロールの再定義

ワーキンググループは、すべての図書館資料、多様なコミュニティの利用者、および情報が求められる多数の場面などをも含む、書誌コントロールの広い定義を採用することを強く推奨する。

・資源の多様化と多様な資源への統一的なアクセスを保証する

図書館によって購入される刊行物、図書館がユーザアクセスのために契約する資料、一般のネットワークで利用可能な電子資料、そして個々の図書館所蔵の唯一資料など。これらの資料へのアクセスが、書誌コントロールの統一的な考え方によって提供されることが望ましい。

・異なる資源のタイプをめぐって、異なる書誌的活動を行うコミュニティが成長してきた。

たとえば図書や逐刊物といった図書館コレクション、文書、雑誌記事、博物資料や映像など。

これらの資源や他のものは、ますます Web を通じてアクセス可能になっている。書誌コントロールが、コミュニティを越えて、著作、名称、概念そして物の記述の間の関係を取り扱うことがますます重要になってきている。

図書館目録のように、単一の環境の中での記述の一貫性を追求する重要性は薄れてきた。それに代わって、アマゾン、WorldCat、Google、PubMed、ウィキペディアといった異なる環境の間の関係を構築する重要性が増大してきた。これらを統合する基盤である Web 世界においては、図書館の所蔵記録は一つのノードに過ぎない。

・書誌コントロールは分散的であるべきである

今日では、情報世界へのアクセスに対する組織化および提供のために使用可能でまた使用されるべき多くの他の情報源が存在する。これらのリソースを活用するため、書誌コントロールを集中的なものではなく、分散的な活動として捉える視点が必要である。

・コレクションの利用に関するデータも重要である

引用リンク、利用数や販売数なども有効な情報である。またユーザが発するデータ、たとえば書評やランキングなども、有用である。

5 - 2 . 書誌的世界の再定義

従来公共財と考えられてきた情報アクセスは、経済活動を行う機関にとって利益を生み出す商品となってきた。こういった商業機関は、図書館資源や図書館メタデータを使用し、逆に商業機関の作る本のカバー画像、書評などのデータにリンクするというようなことを行っている。作業の共同分担を継続することが、図書館の将来の成功のための鍵の一つであろう。図書館どうして相互に協力するだけでなく、他の組織と協力することも必要であろう。

5 - 3 . LCの役割の再定義

LC は、他の図書館への恩恵のために行っている領域を絞り込むための判断分析をすべきである。これらの任務が、LC の直接的かつ実質的な利益にならないならば、撤退することもありうる。

こうした撤退の必要性は、書誌データの作成にも適用される。LC は印刷カードの提供を開始して以来、米国の図書館に対して、書誌データの第一の供給源としての役割を担ってきた。さらに、世界中の図書館に対しても、米国で出版された資料の書誌データの第一の供給源ともなっていた。

共同目録作成計画（PCC）のような書誌的ネットワーク活動を通して、図書館コミュニティ全体の専門性を高めてきた。今後 LC は目録コピーの最大の生産者であり続けることに疑いはないが、他の図書館との共同作業を重視する方向へ持っていくべきである。

撤退したり縮小したりした結果の余力は、LC 所有の唯一資料や貴重な資源に対して向けられるべきであろう。

6 . Findings and Recommendations

6 - 1 . 書誌レコード作成および維持における効率性向上

(1) 重複作業の排除

・ 出版社メタデータの利用

多くの出版物は、出版社とベンダーによって電子フォーマットによるメタデータが作られているが、図書館はこれを現状では最小限の利用しかしていない。これを柔軟に取り込むべし。場合によっては、共有のため目録規則を改訂すべき。出版社と協議することも必要。

・ 既存メタデータの活用

抄録・索引サービス、アマゾン、IMDb（映画関係のデータベース）、映画等の発売元から供給されるメタデータ、といったものを活用する。

・ 外国の図書館から提供される MARC を活用。

・ CIP プロセスを自動化（LC）。

ONIX からの自動取込。

・ レコード修正作業を停止

共有目録に反映されない。

・ LC 発の目録製品等の価格設定再検討。

・ 以上により浮いた余力は、統制アクセスポイントの付与、未整理コレクションの目録等に振り向けるべき。

(2) 書誌レコード作成・維持面における責任分担の分散拡大

- ・図書館外、図書館内を問わず、オリジナル目録作成のための責任を分担すべきである。
- ・PCC (Program for Cooperative Cataloging) 事業参加数を拡大する。

(3) 典拠レコード作成・維持における協力

- ・典拠作業は重要。
- ・LC、PCC、図書館界において、典拠作業の共同化を推進すべき。
- ・国際的な共同典拠ファイルの作成事業を推進すべき。VIAF(The Virtual International Authority File) の推進。

6 - 2 . 貴重資料、唯一資料、その他特殊な資料へのアクセス向上

6 - 3 . 将来的な技術の位置づけ

- ・Web を基盤とする。
- ・MARC フォーマットは 40 年前の開発であり、今日のスタイルに合わない。
- ・図書館の規格を Web 対応に改める。
- ・FRBR と RDA の策定は別々の組織によって行われている。両者間の調整が必要。
- ・RDA へ移行するメリットが現状では見当たらない。開発は当面中止すべき。
- ・JSC と DCMI の合同会議を開くべき。

6 - 4 . 将来的な図書館コミュニティの位置づけ

(1) 今日、将来のユーザのための設計

- ・従来別々の標準や活動によって管理されていた資料(雑誌論文、アーカイブ、画像など)は、現在では融合されつつある。
- ・ネット検索エンジンの影響により、ランキングやクラスタリングによる検索結果の変更機能が用いられるようになった。
- ・客観性を重んじる図書館目録の世界では、伝統的に書評や読書リストのような主観的な情報を排除してきた。
ユーザによる入力を利用すべき。

【見解】従来の目録は、あまりにも伝統的な事項にとらわれすぎた。目次は客観的データだが「書誌事項外」とされた。抄録も同様。コンピュータ目録普及後 20 年間も目次・抄録入力を怠ってきた。

(2) FRBR の実現

- ・FRBR、CIDOC、CRM、等のデータモデル化活動が盛んになってきた。
- ・FRBR における Work レベルによるクラスタリングに注目するが、実現のための標準的な方法はなく、また FRBR モデルによるレコード作成をサポートする目録規則も存在しない。
- ・Expression レベルによるメタデータ提供の必要性を検証すべきである。

【見解】範囲を明確に絞り込めない「著作」よりは、内容の同一性を識別する「表現形」認識の方が重要ではないのか。例えば目次を入力して比較すれば、ほぼ機械的に同定できるのではないか。また著作なら、FRBR 以前でもやってきたことである。なぜ FRBR なのか。

(3) LCSH の最適化

- ・ LCSH における件名間の関係性は、シソーラス的关系性（等価、連想、階層）として確立されたが、適用に際し一貫性がない。
- ・ topical、地理、時代、ジャンルといったものを組み合わせる主題ストリングの事前結合形成は、時間がかかり複雑な作業となる。
- ・ 主題ストリングの分解を追求する（Pursue De-Coupling of Subject Strings）
- ・ 他の統制語彙との相互参照を推奨する
LCSH、MeSH、Sears、AAT 等の、相互参照。
DDC、LCSH、LCC 間のより密接な関係づけを行う。
- ・ 自動索引の可能性追求

【見解】抄録索引の世界では、シンタックスは事実上使われていない。図書の場合、シンタックスはより重要という説もあるが、ほんとうか？（さらにいえば、もはや図書や論文に限定して検索する時代ではない）。オンライン環境下なら、ストリングを流し読みする機能であろうがまるで普及しない。ストリング索引は、とどのつまりページ印刷型の機能ではないのか。事前結合索引 ページ印刷型流し読み機能 単一概念というよりは複合語、句による表現、転置形等を多用 個々の概念の把握困難 階層関係もいい加減、という悪循環。件名標目表は、130 年間本質的に何も変わっていない。

- ・ LCC や DDC といった多様な文脈やシンタックスを内蔵した索引言語と、単一概念型のシソーラスとはまるで折りが合わない。互換性はそもそも無理。また主題分野ごとの概念多出をどう処理するのか。

【参考文献】

- 1) Library of Congress. Working Group on the Future of Bibliographic Control
<http://www.loc.gov/bibliographic-future/>
- 2) On the Record : Report of The Library of Congress Working Group on the Future of Bibliographic Control. January 9, 2008
<http://www.loc.gov/bibliographic-future/news/lcwg-ontherecord-jan08-final.pdf>
- 3) Testimony Submitted to the Library of Congress Working Group on the Future of Bibliographic Control. Part I, Organizational and Institutional Submissions(December 15, 2007)
http://www.loc.gov/bibliographic-future/news/organizationaltestimony_1.pdf
- 4) Testimony Submitted to the Library of Congress Working Group on the Future of Bibliographic Control. Part II, Submissions by various persons (December 15, 2007)

http://www.loc.gov/bibliographic-future/news/individualtestimony_2.pdf

5) 書誌コントロールの将来に向けた LC の取り組み / 倉光典子

カレントアウェアネス No.295 2008年3月20日

<http://current.ndl.go.jp/ca1650>

6) Response to On the Record: Report of the Library of Congress Working Group on the Future of Bibliographic Control. June 2, 2008 (Associate Librarian Deanna Marcum's response to the Final Report)

http://www.loc.gov/bibliographic-future/news/LCWGRptResponse_DM_053008.pdf

7) Library of Congress Subject Headings : Pre- vs. Post-Coordination and Related Issues

Report for Beacher Wiggins, Director, Acquisitions & Bibliographic Access Directorate, Library Services, Library of Congress / Prepared by the Cataloging Policy and Support Office. March 15, 2007

http://www.loc.gov/catdir/cpsa/pre_vs_post.pdf